地域福祉の現場学ぶ

東北福祉大　学生20人が大崎訪れ

大崎市社会福祉協議会と東北福祉大は22日、「福祉事業推進に係る連携協定」に基づく実践活動を大崎市内3カ所で行った。協定は大崎市を含む3者で締結したもので、実践活動の実施は初めて。東北福祉大福祉行政学科の学生約20人が大崎市を訪れ、福祉に関わる地域課題とその解決に向けた取り組みを現地で見聞きし、理解と学びを深めた。

協定に基づく初の実践活動

2月に結んだ同協定は、市と社協が学びの場を提供し、大学側は福祉課題解決への提案や、災害時に学生ボランティア派遣を行うもの。この日、学生たちは古川清滝、鹿島台姥ケ沢、岩出山上野目各地区を訪問した。

岩出山上野目地区では、1年生と3年生6人が地域生活支援事業「かみのめささエール」（小野松佳孝運営委員会長）や高齢者の親睦・健康維持活動を行っている「上野目福祉会」（佐々木善弘会長）について、関係者から講話を聞いた。

かみのめささエールは、1人暮らし高齢者や高齢夫婦らに住み慣れた地域で生活を続けてもらおうと、除草やごみ出しなどを住民が有償ボランティアで行う。上野目福祉会が地域包括ケアシステムの一環で検討していたもので、2021年に始まった。

近年の課題は、支援する側の高齢化。発足当初は60人近くいたボランティアもこの3年間で半減し、持続的な活動が難しくなっているという。

講話後、学生たちは市社協の車で地区内を巡り、山あいの田んぼや草刈りの委託を受けた場所、史跡、唯一のスーパーマーケットなどを視察した。

3年の斎藤さくらさん(21)は「住民の力で困っている人を支えようとする精神が強い地区。活動を続けていくためには、(次の世代を担う）若い人に広く知ってもらうのが一番だと思う」と話していた。

この日学んだこと、気づいたことをもとに解決策を考え、7月13日の再訪問で提案する。

◇　◇

鹿島台を訪れたのは1～3年生計6人。姥ケ沢地区の敬老会に参加し、高齢化と1人暮らし世帯の増加が進む一方で、お年寄りが集まる機会をつくる取り組みに触れたほか、水害との苦闘の歴史を学んだ。

敬老会を主催した同行政区の柴和雄区長(74)によると、参加対象としている77歳以上の住民は地区民全体の1割強に当たる約120人を数え、1人暮らしも多い。そこで敬老会や「いきいき百歳体操」が貴重な交流の場になっているという。

学生たちは、祖父母ほど年の離れた参加者たちと談笑したほか、地区一帯を襲った令和元年東日本台風などの水害被害写真、品井沼干拓の困難を伝える史跡を見学し、苦難の歩みに触れた。

これらを踏まえ、次回は鍋を使った炊飯などの防災体験を予定している。

上野目地区を視察する学生たち

インスタントカメラで撮った写真をプレゼントするなどしてお年寄りと交流した

復興へ！がんばろう